

この街 この逸品(19)

日用品・広告品からインテリア雑貨まで

マッチ 神戸市・姫路市



カラフルな頭葉のマッチ棒は可愛らしい。



箱詰め作業。この道60年以上の工場長が良品と不良品を瞬時に見分ける。



人気商品の『2こまっち』(左)と『レトロラベル缶マッチ』(右)。

1827年イギリスで発明されたマッチは、それまでの木や石を使う火起こしの作業を劇的に単純化しました。しかし、問題は高価なことで、明治初期の日本では、輸入品のマッチ1箱は米4升と見合うほどでした。1875年には国内生産が始まり、神戸は、当時日本一の貿易港であったこと、気候的にも乾燥工程の多いマッチ製造に適していたこと等から、輸出向けを中心にマッチ産業が勃興しました。やがて国内でもマッチは日用品となり、戦後は広告用マッチが大ヒットしました。しかし、その後は使い捨てライター

の普及により、マッチの生産量は1973年の80万マッチトン(注)をピークに減少の一途を辿ります。2010年には1.3万マッチトンまで縮小しましたが、その後は2年連続で増加しています。こうした中で、姫路市を中心に兵庫県は現在も国内生産量の9割を占める日本最大のマッチ産地です。

日本燐寸工業会(神戸市)を訪ね、中川新一朗専務理事にお話を伺いました。「東日本大震災以降、マッチは災害時の必需品として見直されています。マッチは保存状態が良ければ数十年使用でき、寒冷地でも着火できます。」

また、日本のマッチは、軸木が丈夫、頭葉が飛び

散らない等安全性が高いうえ、海外のマッチに比べて炎が柔らかいことが特長です。この

ため、欧米のパイプ愛好家に根強い人気があり、現在も生産量の2割は海外向けだそうです。

こうした用途のほか、最近ではデザイン性の高いパッケージや新たな市場開拓に取り組んでいる会社があります。(株)ナカムラ(神戸市)を訪ねると、青、緑、ピンク等とてもカラフルな頭葉のマッチ棒が目にとまりました。「マッチを日用品ではなく、インテリア雑貨にしてはどうか」(中村和弘社長)と考えられたそうです。中村社長は、マッチ箱の表裏に神戸にちなんだ2コマ漫画を描いた『2こまっち』、レトロな『復刻ラベルマッチ』、アウトドアや災害時に重宝な『缶マッチ』等、様々なアイデア商品を見せてくださいました。

2009年から日本燐寸工業会は、多くの観光客が訪れる「北野工房のまち」の中に、マッチ専門店『マッチ棒』をオープンしています。神戸の伝統産業であるマッチは、お洒落に生まれ変わり、新たなお土産品としても期待されています。



マッチ専門店「マッチ棒」。どれにしようか迷う程、魅力的なマッチが並ぶ。

(注)1マッチトンは並型マッチ(56×36×17mm)で7,200個